

【翻 訳】

## 劉基長子劉璉の死因試探

王雅洁<sup>(1)</sup> 著

荷 見 守 義 訳

**要旨：**劉基の長子である劉璉の死因について、著者は史料上、三つの説を確認した。それは「病に因り在任中に死す」、「政敵の脅迫に因り井戸に墮ちて致死す」、「胡惟庸の党派に薬殺されて死す」の三説であり、そのうち、第三説が事実とすべきである。この説は明太祖が劉璉の弟である劉璟に親しく示したことであり、この時、その場には劉璟以外にも若干の朝臣が同席していたことに加えて、また、明太祖が度々このことに言及したことから、事実無根であることも顧みず口から出任せを言ったとは判断できない。そのほか、明太祖がこのことを劉璟に話した時期は洪武21年末から同23年末であり、これは洪武13年初めに胡惟庸が殺されてからすでに九年以上経った時期のことであり、この時期に明太祖が胡惟庸の獄の処理ために新たな証拠を増やす必要があったことを明示する如何なる史料も今に至るまで発見されていないことから、この時の言及内容は特段の偽造には当たらないと見るべきである。史料から見て、劉璉の人となりはその父劉基と同じく、国家のためなら剛直であり、胡党と同調して悪に染まるようなことをしなかったことが、胡党から薬殺される原因となったとすべきである。また、その剛直な性格から、政敵の脅迫により井戸に墮ちて死んだとは思えないことも傍証できる。その死因を疾病に帰着させる説については、彼と関係が密接な立場の人間から出されたものであり、感情の面から言えば彼らはその正常ならざる死について語ることを避ける。その心情は理解できるが、角度を換えてこのことに向かい合うべきである。劉璉は悪党に頭を下げなかったために被害に遭ったのであり、その死は寧ろ光栄かつ偉大であり、彼と身近な人々はこのことを自ら誇るべきであり、また、その高貴な品格に学べば、非業の死を遂げた劉璉も地下で安息するであろう。

キーワード：劉璉 品格 死因

明朝初期の開国功臣劉基には二人の息子がおり、長男の名は璉、字は孟藻、次男は璟である。劉璟が自殺したことは史料上ははっきりしているが<sup>(2)</sup>、劉璉の死因については記述上、一つではない。著者が史料を閲読を通して、劉璉の死因について発見したことについて以下に簡述し、諸賢の教示を仰ぐものである。

劉璉の死因について、筆者は史料上、すでに合計で三説を見出した。

その第一の死因は在任中に病死したとするものである。例えば、呉從善撰「故参政劉君孟藻哀辭・序」では、「(劉璉は)考功監丞より、試監察御史を歴て、江西等処承宣布政使司右参政と為り、階を積みて中奉大夫に至り、年三十有二にして疾を以て位に薨す。」<sup>(3)</sup>とある。また、温州博物館蔵劉廷梁等抄録『劉基家譜』収録の「参政公伝」は劉璉の伝記であるが、一千字近くの文章であり、その中で、「孟藻は(同官の沈)立本の専恣に憤りて疾を致し、六月某日、公署に終わる。」とある<sup>(4)</sup>。

第二は政敵の脅迫により井戸に墮ちて死んだと記されることである。国家図書館蔵313巻抄本『明史紀伝』巻42、劉基伝の附伝である劉璉伝では第6頁下から第7頁上にかけての記載に、「(劉)璉、字は孟藻、文行あり。洪武十年、考功監丞、試監察御史を授かり、出でて江西参政となる。太祖嘗て大いに之を用いんと欲すも、胡惟庸党の脅す所と為り、井に墮ちて死す。」<sup>(5)</sup>とあり、この種の意見を持つものにまた徐乾学の『明史列伝』巻10、劉基伝附伝の劉璉伝<sup>(6)</sup>、416巻旧題万斯同撰『明史』巻171、劉基伝附伝の劉璉伝<sup>(7)</sup>、王鴻緒撰『明史稿』列伝18の劉基伝附伝の劉璉伝<sup>(8)</sup>、張廷玉等撰『明史』巻128の劉基伝附伝の劉璉伝<sup>(9)</sup>があり、ただ、その中の王鴻緒撰『明史稿』及び張廷玉等撰『明史』の「太祖は嘗て大いに之を用いんと欲す」は「太祖常に大いに之を用いんと欲す」となっているものの、伝記のその他の文章は完全に同じである。

第三は胡惟庸の党派によって「薬殺」されて死んだと記されることである。林家驪点校本『劉基集』<sup>(10)</sup>附録五に掲載される「誠意伯次子閤門使劉仲璟遇恩録」では、洪武20年から24年に至る期間に劉基の次子劉璟は明太祖に逐次拝謁したことと、拝謁時の明太祖の発言内容を記載しているが、その中では度々劉璉致死の状況に言及した内容があり、そこでは、「洪武二十一年十二月二十五日、早朝奉天門において、再び面見し、……欽みて聖旨を奉けるに、「…劉伯温(伯温は劉基の号 引用者註)、<sup>かれ</sup>他がここに在りし時、滿朝みなこれ党であり、只これ他一個、他に從わず、他毎(毎は現代語の們、以下同じ 引用者註)の蠱を吃べた。他の大の兒子、この小も厲害で、他に從わず、他毎の害を吃べた。この起反の臣はみな我が廢を吃べ、墳墓も發掘した。」(668頁を見よ)とあり、また、「洪武二十三年正月初四日、……再び奉天門の左暖房内において謝恩し、欽みて聖旨を奉けるに、「……劉伯温他父子兩、みな<sup>そ</sup>那の反臣毎の害を吃べた。我は他の老いと病と思ひ込んだが、<sup>なんと</sup>原来蠱を吃べた。」(669頁を見よ)とあり、また、「(洪武二十三年六月初七日)聖旨(を奉け)、「你(劉基の次子劉璟を指す 引用者註)の父兄は一世の好人であり、みなとても落ち着いて静かであった。你的父親は胡家が下した蠱薬を吃べた。哥(劉基を指す 引用者註)も他の害を吃べた。」(670頁を見よ)とあり、「(洪武二十三年十二月二十二日、聖旨を奉けるに)「<sup>のち</sup>後來、胡家は党を結し、他(劉基を指す 引用者註)は他が下した蠱を吃べた。するとある一日、来たりて我と話し、「上位、臣は目下、肚の内に硬結一塊があり、<sup>いた</sup>恒みます。恐らく好くはありません」と。我は人を<sup>つ</sup>着けて他を家に<sup>かえ</sup>回去させたが、死んだ。後來、他の兒子を<sup>め</sup>宣して来させて問うに、「<sup>ふく</sup>脹れること緊々とし、後來、瀉すること驚々であり、すぐに死んだ」と。これは正に蠱が着いたのだ。他の大兒子は江西にあって、やはり他の薬を吃べて殺されたのだ。」(670頁を見よ)とある。

以上の三説では、第三説が正しいとすべきである。この説は明太祖が親しく劉璟に述べたことで

あり、この説を記載した前引の文章から見て、明太祖がこの説に言及した時、その場には劉璟以外にも若干の朝臣が居たこと（その第一段、第二段、第四段の文章中の「他大兒子」、「劉伯温他父子兩」、「他大兒子在江西」等とある言葉のこの種の口ぶりは、劉璟以外にもほかの朝臣がその場にいる時にこそ使われる）、これに加えてまた度々このことに言及していることから、明太祖が事実無根であることも顧みず口から出任せを言ったとは判断できない。そのほか、明太祖がこのことを劉璟らに話した時期は洪武21年12月25日から23年12月22日に至るまでであり、これは洪武13年正月に胡惟庸が劉基らを毒殺した事により殺された時よりすでに九年以上経った時期のことであり、今に至るまで、いかなる史料からも、この時期に明太祖が胡惟庸の獄の処理のために新たな証拠を増やす必要があったことを示す何らの記載も発見されていないことから、この時の言及は特段の偽造には当たらないと見るべきである。『明太祖実録』卷129、洪武13年正月甲午（2日）の条の記載を調べてみるに、「御史中丞涂節、左丞相胡惟庸と御史大夫陳寧等の謀反を告げ、前の誠意伯劉基を毒殺した事に及び、廷臣に命じて審録せしめ、上、時に自ら之を臨問す。初め……、誠意伯劉基も亦た嘗て惟庸の姦態を上言し、用うべからずと為す。惟庸、之を知り、是に由りて基を怨恨す。基病になるに及び、惟庸に詔して之を視さしむに、惟庸医を挾して往き、毒を以て之に中らしめ、基竟に死す。時に（洪武）八年正月なり。上、基の病久しきを以て疑わず。……惟庸懼れ……事を起こさんと謀り、……涂節、事覚するを恐れ、乃お変を上り、告げて……（上は）群臣に命じて更訊し、惟庸辞窮し、隠す能わず、遂に実を吐く。」<sup>(11)</sup>とある。これから見るに、劉璉が胡惟庸の党派に薬殺されたことに関しては、洪武13年正月においてはまだ発覚しておらず、その時は僅かに劉基が毒殺されたことが発覚しただけであった。明太祖の洪武21年12月から23年12月にかけて、劉璉が薬殺されたことに言及したということは、洪武13年正月の後、一定の時間が過ぎてから、やっと発覚したとすべきである。

劉璉の人となりはその父劉基と極めて相似して、国政においては剛直であり、胡党と同調して悪に染まるようなことをしなかった。当時の人であり、曾て編修に任じられた呉從善は「故参政劉君孟藻哀辞・序」において、「（洪武）十年夏六月、（劉璉は）既に（孝）服を積され、遂に考功の命を拝し、……年を越ずして、而して佐藩閩に超され、將に大任有らんとす。十二年、刑部尚書沈立本を出して布政使と為す。立本素より権臣（胡惟庸を指す 引用者註）に諂附し、官に至りては即ち以て之に媚びる所の事を求めるも、孟藻、牢として不可を持す。立本、屢々ややもすると危言を以て、孟藻を脅制せんと欲す。孟藻怒りて曰く、「吾が廷、帝命を受け、江右に参政たるは、国に報いんことを知るのみ。他は卹れまざる所なり。何ぞ使に有らんかな。」とする<sup>(12)</sup>。『劉基家譜』中の「参政公（劉璉）伝」には、「その江西に在りてや、同官韓士原は貪にして而して苛、沈立本は陰佞にして而して大体を知らず、孟藻は一に忠信を以て自処に介直、事に臨んで決議し、俯仰を為さず、口語の之を侵すと雖も変わらず。一号一令、利病を忖度す。」<sup>(13)</sup>とある。劉璉が胡惟庸党に反対し、これと同調して悪に染まるような官界遊泳術を受け入れなかったことが分かり、胡惟庸の党派に薬殺された原因も十分に理解できる。また、所謂「（胡）惟庸の脅かす所と為り、（劉璉）が

井に墮ちて死」んだとする説に対しても、これにより信じることはできない。「事に臨んで決議し、俯仰を為さず、口語の之を侵すと雖も変わらず。」の劉璉はかくのごとく剛直・不屈であるので、どうして政敵に脅迫されたことで井戸に墮ちて死ぬようなことがあろうか。恐らくは密かに医者を買収してその人を毒殺したと考えて大過はなかろう。

劉璉の死因を疾病に帰することもまた信じることはできない。ただ、上述の両例を主張する文献の作者を分析すると、彼らはみな劉璉と特段近い関係にあったことが分かる。例えば「故参政劉君孟藻哀辭・序」の作者である呉從善のごときは曾て「翰林院編修官」であり、劉璉と同郷（「同郡」）であって、彼の自述では「孟藻は余と通家を為し、兄弟の好有り。余の齒は差長たりて、班ごとに孟藻の上にある。余と京官を忝し、孟藻の（京に）来たりて、実に余に主たり、可否は必ず籌し、飲食は必ず耦し、寝は必ず席を同じくす。」<sup>(14)</sup>とある。また、『劉基家譜』『参政公伝』の手抄者の劉廷梁は清朝末期の人であるが、劉基の第十八代の子孫であり、劉璉からすれば第十七代の子孫である<sup>(15)</sup>。これらの劉璉と近い関係を持つ人々は、一般的に言えば、親愛の情を表出する必要があり、劉璉の真正の死因を口にし文にするには忍びなかったとすべきである。中国人の伝統的な理念では、有徳の者は当然、良い報いがあるべきであり、この世を去るに当たっては正常に亡くなるべきであり、つまりは大往生を遂げるべきなのであるが、人々が仇を呪詛する言葉の一つが「好き死を得られず」である。このことにより、親密な関係にある人間の筆になる、劉璉は疾病で死んだとする言い分は、真実性が極めて低いとすべきであり、拠るべき証拠において「薬殺」による死であると示されている状況においては、信用することはできない史料に含めるべきである。

史料中の劉璉に対する死因について、或いはそれを避けて述べないものがあり、そこではただその死を記述するだけで、その原因には及ばない。黄伯生撰「故誠意伯劉公（基）行状」はそうであって、「（劉基は）子男二人。長は璉、考功監丞より江西参政に任じられ、官に卒す。」<sup>(16)</sup>とある。この種の死因を避けて述べないものは、実は上述の疾病で致死したと仮称するものと本質的には完全に同じであり、劉璉と近い関係にある人間が劉璉の真正の死因について口にし文にすることが心に忍びないのである。黄伯生が劉璉の『自怡集』のために書いた序を見てみると、この黄某なる人間も劉璉と同郷でありかつ親友であったことが分かる。そこには「予（黄伯生の自称 引用者註）は故郷にあり、辱なくも孟藻兄弟の間に遊び、京師に竊禄するに及び、孟藻と闕下に待詔し、未だ嘗て一日として相親しからざるなし。」とある。この序の末尾の署名は「将仕郎秦府紀善同郡黄伯生序」<sup>(17)</sup>である。

劉璉と近い関係の人間は種々の方法でその不正常的な死亡の事象について語ることを忌み、この事に及ぶことを願わず、他人に知られることも願わない。その心情を理解することはできる。しかし、彼らは角度を換えて見れば、この件に向かい合うことを待っているかのようである。劉璉が正常に人生を渡り終えることができなかつたということは、自分自身で国事に忠誠を尽くし、悪党に頭を下げなかつたことによるもので、その死は寧ろ光栄かつ偉大であり、その家人や後生の人々或いは友人がこのことを引いて自ら誇るべきである。そのためにはこの事を正視すべきであり、その



精神を発揚し、あくまで故人の事業に更なる光を当てるようにすべきである。そうすれば、すでに幽冥異にした劉璉もきっと地下で安息するであろう。

## 註

- (1) 王雅洁、1986年8月7日、山東省青州市の生まれ。廊坊師範学院講師 専門は中国明代史。修士。
- (2) 張廷玉等撰『明史』卷128、劉基伝に附する環伝参照。
- (3) 『文淵閣四庫全書』第1233、第349頁、『自怡集』附録参照。原文は、「由考功監丞、歴試監察御史、為江西等處承宣布政使司右參政、積階至中奉大夫、年三十有二以疾薨于位。」である。
- (4) 胡珠生「『劉基家譜』の史料価値」(浙江工貿職業技術学院等編、2006年中国温州『國際劉基文化學術研討會論文集』第453頁)から転載した。この論文集は南炳文教授から提供頂いた。謹んで謝意を表す。なお原文は、「孟藻憤立本專恣致疾、六月某日、終于公署。」である。
- (5) 璉、字孟藻、有文行。洪武十年、授考功監丞、試監察御史、出為江西參政。太祖嘗欲大用之、為胡惟庸党所脅、墮井死。
- (6) 周駿富輯『明代伝記叢刊』(台湾明文書局出版)第89冊第361頁。
- (7) 『統修四庫全書』影印本。
- (8) 雍正元年敬慎堂本。
- (9) 中華書局1973年標点本。
- (10) 浙江古籍出版社、1999年12月出版。原文は、「洪武二十一年十二月二十五日、早朝奉天門、再面見。……欽奉聖旨、……劉伯温他在这里時、滿朝都是党、只是他一个不從他、吃他每蠱了。他大的兒子、这小的也厲害、不從他、也吃他每害了。这起反臣都吃我廢了、坟墓發掘了。」(668頁)、「洪武二十三年正月初四日、……再於奉天門左暖房內謝恩、欽奉聖旨、……劉伯温他父子兩、都吃那反臣每害了。我只道他老病、原来吃蠱了。」(669頁)、「聖旨、你父兄做一世好人、都停停当当的了。你父親吃胡家下了蠱藥、哥也吃他害了。」(670頁)、「後來、胡家結党、他吃他下了蠱、只見一日來和我說、上位、臣如今肚內一块硬結、怛、諒者不好。我着人送他回去家里、死了。後來宣得他兒子來問、說道、脹起來、緊緊的、後來瀉得驚驚的、却死了。这正是着了蠱。他大兒子在江西、也吃他藥殺了。」(670頁)である。
- (11) 御史中丞涂節告左丞相胡惟庸与御史大夫陳寧等謀反、及前毒殺誠意伯劉基事、命廷臣審録、上時自臨問之。初……誠意伯劉基亦嘗為上言惟庸恣恣、不可用、惟庸知之、由是怨恨基、及基病、詔惟庸視之、惟庸扶医往、以毒中之、基竟死、時八年正月也、上以基病久不疑。……惟庸懼。……謀起事。……涂節恐事覺、乃上變告……命群臣更訊、惟庸辭窮、不能隱、遂吐實。
- (12) 『文淵閣四庫全書』第1233、第350頁、『自怡集』附録。原文は、「十年夏六月、既積服、遂拜考功之命。……不越年而超佐藩閩、將有大任焉。十二年、出刑部尚書沈立本為布政使。立本素諂附權臣、至官即求所以媚之之事、孟藻牢持不可。立本屢動以危言、欲胁迫孟藻。孟藻怒曰、吾廷受帝命、參政江右、知報国而已、他所不卹、何有于使哉。」である。
- (13) 註(4)に同じ。原文は、「其在江西也、同官韓士原貪而苛、沈立本險佞而不知大体、孟藻一以忠信介直自處、臨事決議不為俯仰、雖口語侵之不變。一号一令、忖度利病。」である。
- (14) 『文淵閣四庫全書』第1233、第349頁、『自怡集』附録、「故參政劉君孟藻哀辭・序」。原文は、「孟藻与余為通家、有兄弟之好。余齒差長、每班孟藻上。暨余忝京官、孟藻之來、実主於余、可否必籌、飲食必耦、寢必同席。」である。
- (15) 註(4)に同じ。
- (16) 『文淵閣四庫全書』第1225、第484頁、『誠意伯文集』卷20、雜録、上海古籍出版社、2012年6月出版。原文は、

「子男二人。長璉、由考功監丞任江西参政、卒於官。」である。

- (17) 『文淵閣四庫全書』第1233冊、第337頁。原文は、「予在郷里、辱游孟藻兄弟間、及窃禄京師、与孟藻待诏闕下、未嘗一日不相親也。」である。

## 参考文献

- (1) 胡珠生「『劉基家譜』の史料価値」 浙江工貿職業技術学院等編『国際劉基文化学術研討会論文集』2006年、中国温州。
- (2) 張廷玉等撰『明史』中華書局、1973年版。
- (3) 周駿富輯『明代伝記叢刊』台湾明文書局出版。
- (4) 『文淵閣四庫全書』上海古籍出版社、2012年版。
- (5) 林家驪点校『劉基集』附録一「誠意伯劉公行状」、浙江古籍出版社、1999年12月、第1版。
- (6) 『明実録』中華書局、2016年版。